

——平成五年度新入生対象講演会（平成五年十一月二十六日・札幌大学講堂）——

大学が変われば社会が変わる

橋爪大三郎

こんにちは。

今、ご紹介に預かりました橋爪大三郎です。

今日は、北海道の札幌大学にお招きをいただきまして大変光栄に思っています。

札幌に来たのは、実は恥ずかしいことながら初めてでしたが、街の様子なども大変気に入って、ぜひまた近いうちに来てみたいなど思っております。

今日は、「大学が変われば社会が変わる」という題の話を一時間ほどします。手元のプリントにあるような大体三つの内容を考えてきたんですが、必ずしもこのプリントにとられないで、思いつくままに喋るといふふうなやり方でやってみたいと思います。

講師の紹介というところにごしやごしや書いてありますが、これは要するに本の宣伝でありまして、もし興味がありそうなタイトルの本があったらばらばらと見て、それでもおもしろそうだったら買ってお家に帰って読んでください。

最初に、大学というものはどういふものなのかということをお話しますが、実は私は、余りこういふことを話す資格がないんじゃないかなと思っっています。私が大学一年生だったころ、というのは多分、皆さん生まれていらっしやらないと思います。大昔です。しかし、そのころと今と同じ点があると、大学はあまりおもしろくなくなっ

た。今の方がちょっとおもしろいかとは思いますが、当時は非常におもしろくないということをお話して、大学に入って発見いたしましたので、私は余り大学に出なかつたんです。それでも初め、一年生のときは、学校というものは出るものだと思っていましたから、休まないで夏休みまでちゃんと毎日授業に出てノートもとって、英語は単語帳まで作って、高校のときのように勉強したんです。そしてらば試験にそんなことはちつとも出ないじゃありませんか。数学などもちゃんと予習をしていたのに、数学についてあなたの考えを書きなさいとか、そういう大雑把な問題が出まして、私は頭に来てしまいました。それで要するに大学は出てこなくてもいいところだということを、一学期でわかつたわけです。

そこで、私は授業に出るのをやめました。大学というのは夕方になると終わっちゃうわけですが、その頃から授業中に現れない不思議な人たちが大学にやってみたりまして、それからサークル活動が始まるわけですね。またそのころは、学生運動のセクトや過激派などもおりましたから、何年大学にいるんだらうというふうな不思議な人たちは大体そのころから出没してくるわけです。そういう人たちが非常におもしろいということがわかりました。授業に出るかわりに、私は、サークルに入って実はお芝居などをやっておったわけですが、お芝居を始めると稽古が忙しくて授業に出られないということがわかりまし

た。授業には二学期は出ませんでした。三学期（二年生）になって、公演が終わったので授業に出ようと思ったら、機動隊が入ってストライキになってしまったんですね。二年生の一年間と三年生の二年間ぐらいはストライキですから授業はなく、授業が始まったから始まったで、何か同盟で授業をサポートジュするとかみんな言っているではありませんか。それで私も加わりましてサポートジュをしましたから三年の授業には出ていなくて、四年生のときにもちょっとは出ましたけれども、結局、合計して一年ぐらいしか大学に出ていないんじゃないかと思えます。それでも卒業してしまつて、大学というのはどうも余りいい思い出がないんですね。ですから、大学についてのお話というのは、あまりする資格がないような気もするんですが、卒業してからよくよく考えてみると、大学というのはやっぱりいいところもある。私が入ったのは、あれは本当の大学じゃなくて、実は学び方によつてはもっとうまく本当の大学に入ることができたんじゃないかなというふうに、今思っています。

私のサークルの先輩で授業に全然出ない男がやっぱりいたんですが、彼はこんなことを言いましたね。大学というのは、「大きく学ぶ」と書くのだ。大きく学ぼうと思ったら教室になんか出ていられないのだよとか何とか言うので、私はすっかりその気になっていたわけです。それは間違いではないと思うんです。しかし、大きく学ぶためにも、目の前にある実際の授業ですね、そういうなかにも役に立つことはいっぱいあるわけで、もっとこういうのをちゃんと使っておけばよかつたと反省しています。

それで、私は大学のことをいろいろもう一回考え直すようになりまして、こういう結論に達しました。それを今からプリントの一番で述べますが、まず、大学というのは、ひと言で定義すると、「人類の知的な共同体」である、こういうふうに言えるんじゃないかと思えます。

これじゃ何を言っているんだかまだちょっとわからない言葉なので、

付言しますと、「人類」というところが大事であつて、大学というのは国際機関なんです、よく考えてみますとね。日本人のためにあるわけじゃない。中国人のためにも、アメリカ人のためにも、何国人のためにもあるわけじゃなくて、「人類」という国籍を取り払った人間のためにある国際機関なんです。大学は全部そうやってできているんです。そのことを私は余りよくわかっていなかったもので、まずそれを反省しました。

人類と言いましたが、ここで言うのは、特定の人種とか民族とか文化に関係ない、そういう知識を中心にした人間の集まりです。知識とは何かというと、誰だって知識は持っているわけなんです、そういう狭い知識じゃなくて、物を考える場合の方法や成果—それは書物に著されるわけですけども—そういうふうに、書くことができるような、みんな利用できるような知識、だと思えます。つまり普遍的な知識なんです。

「普遍的」という言葉も私は大学に入ってから卒業するまでほとんど理解しておりませんでした。英語で書くと、universalと言いますよね。これは宇宙という意味の universal から来ている言葉でしょう。宇宙というのが形容詞になるとどうして「普遍的」になるのかというのは私は疑問に思いました。それからこれがもう一回ひっくり返ると大学 (university) というものになるわけなんですけれども、どうしてこの三つの言葉が関係があるのかなということ。私の得た結論はこうです。宇宙というのはあらゆる時点、あらゆる場所を包括するんです。この中にはどんな時点もどんな場所もみんな入っている。だから、いつでもどこでも必ず言えること、正しいことを「普遍的」と言うわけですね。今日ここでしか成り立たないことは、「普遍的」ではありません。明日になれば、よその土地に行けば、それは正しくなくなっちゃうからです。だけれども、いつでもどこでも正しいことは、それはみんなが信じて大丈夫な知識です。日本人にしか通用しない知識を

日本人が信じれば、必ずほかの民族と衝突します。今の時代にしか通用しない知識を身につければ、次の時代になればそれはひっくり返ってしまいます。そういうことは大学では教えないし、教えてはいけません。そうじゃなくて、どの国の民族も、どういう文化の人々もみんなで共有できるような知識のためにできたもの、それが大学なんだということ、大学の歴史を考えていってだんだんわかるようになります。そこでその知識は普遍的、つまり宇宙的でなければなりません。そういう総合的な観点から作った組織を大学と言うんですね。

そこで、こういう意味から言うと、大学の入学試験で合格しなかった人も含めて、人類全員が入学する目に見えない大きな大学というのが本当はあるんだ。皆さんは大学に入ったときに、この目に見えない大きな大学に本当は入ったんじゃないか。ただ、実際に通っているのは、この目に見えない大きな大学の、日本の札幌というところにある札幌大学分校である、こういうふうに考えればいいんじゃないでしょうか。だから、札幌大学っていい大学だと思えますけれども、私の大学はよくない大学だったんですけれども、たとえよくない点があってもめげないで、それは目に見えない大学の方がきつといいんだらうなというふうに思って、前に進んでいくというのがよかったです、今思うわけです。

プリントの二番というところに行くんですけども、じゃ、どういう知識が普遍的かということですよ。

いま、普遍的と言って間違いない知識は自然科学、物理学をはじめとする自然科学でしょう。どうして自然科学は普遍的でしょうか。なぜ自然科学は普遍的だと言えるか。実験ができるからです。実験というものは、どこでいつ何回繰り返しても同じ結果が出る。誰かが今ここで実験して成功して、そのあとほかの人が実験してできなくなっちゃったら、それはオカルト番組になっちゃうわけです。そうじゃなくて何回繰り返しても同じ結果が出るから、研究ができるわけでしょう。

そういう「再現性」を持った現象があることを発見したときから、物理学というのができたわけですよ。追試というのをやって、誰でも同じ知識が得られるような方法がちゃんあるわけだ。そこで、自然科学は世界中の人間が信じて構わない知識だというわけで、世界中の大学で教えているのです。

今こそ自然科学が、大学の中心みたいになつていますけれども、これはわりに最近のことで、自然科学は昔は哲学の一部だったし、大学では昔、自然科学なんて教えていなかった。たかだか自然科学には、四百年の歴史しかありません。しかし、大学の歴史はもつとずっと長いんですね。じゃ、初め、大学で何を教えていたかというと、これも大学卒業してからいろいろ研究したり、人に教わったりしてわかったことですが、宗教だったんです。大学は宗教を研究するためにできたということまず押さえますよ。

もつとも、そうじゃないのがあります。例えば、ギリシャのアカデメイアなんていうのは、宗教と関係ないんですけども、ああいうのを作ったのはギリシャ人だけの趣味みたいなものですから、幾何学とか哲学を教えていたんですが、ちょっと置いておきましょう。

そうすると、世界で最初に義務教育に近いシステムをこしらえて、学校をどんどこしらえたのはユダヤ人だということがわかります。

ユダヤ人たちはどうして学校をこしらえたのかというと、彼らには聖書というものがあつたからです。キリスト教の聖書と同じですけども、キリスト教徒が旧約聖書と呼んでいる部分がユダヤ教の聖書です。これは普通の本ではなくて、ユダヤ人たちが実際に生活をしていくための規準になる大事な本だったんです。例えば、結婚の仕方とか、相続の方法とか、そういう日常生活の細々としたことも全部聖書にのっとって生活しなければなりません。これがユダヤ教徒です。そうすると、そのテキストの細かいところをよく研究する必要があります。そこでユダヤの人びとは学校を作つて、そこで聖書について勉強した

わけです。イエス・キリストという人も、そういう学校での勉強の中から出てきた、特別な天才でした。

でも、ユダヤ教の学校というのは今に至るもずっとあるんですけれども、今日の学校の先祖だと考えられていません。どうしてかというところ、そこでは、ユダヤ人しか勉強できないからです。どういう民族の人間でも勉強できるという性質がちょっとなかった。

本当に普遍的な学校を作ったのは、イスラム教徒だと思います。イスラム教というのは、皆さんあまりイメージわかないかもしれませんが、大抵のことは御存じですね。メッカの方向に向けて一日五回礼拝をすなくちやいけないとか、豚肉は食べてはいけないとか、一年に一回ラマダン（断食月）があつて昼間は食事をしてはいけないとか、いろいろなことが決まっています。どうしてそれを守らなければならぬかというところ、神アラーがそう命令したからです。その命令した内容は、コーランという本に書いてあるわけです。これは世界中の人たちに命令したわけですね。

このコーランの内容が法律になりました。これがイスラム法で、七世紀半ばごろからだんだんだん発達してきたんですけれども、神の命令に従って生活していくためには、コーランに従って生活しなければならぬ。それにはイスラム法を研究して、それに従うことになるわけです。そこでイスラム教徒の間には、イスラム法の勉強をするイスラム法学者という人が大勢出てくることになります。例えば、今でもイランにホメイニ師なんていう人がこの間までいてイランの国民を指導していましたが、あの人も法学者です。そういう人がイスラム世界には必ずいて、その国の知識人としてその国を引っ張っていついてるんです。そういう、イスラム法に詳しい知識人たちが出てきますが、そういう人たちはどういふふうにして勉強するかというと、子供るときからなかなかおまえは飲み込みが早い、なんてほめられるような人は、特定の場所がありまして、アレキサンドリアとか、バグダッ

ドとか、そういうところに建物が建っていて偉い先生がいるから、ここに送られちゃうんですね。そしてトルコ人も、ペルシャ人も、アラビア人も、モロッコ人も、世界中のあらゆる民族が集まってきて、人種に関係なく世界中の人たちが信じるべきであるとされたイスラム教の勉強をしていく、そんな大学ができたんです。

どうしてそういうふうになったかというところ、プリントに「二重の幸福論」と書いてありますけれども、イスラム教に立ち入ってもうちょっとだけ説明しましょう。イスラム教の場合、最後の審判があります。最後の審判の後、救われて天国に行く、これがイスラム教徒にとってとても大切なことです。最後の審判が来るまでのイスラム教徒は、どうやって生活していればいいのか。まず、イスラム法を守る。イスラム法を守って生活するのが正しいので、イスラム教をきちんと守っていれば、最後の審判のときに、おまえはなかなかよく法を守りましたねというのでプラスアルファで天国に行ける確率が高くなる。こういうふうな宗教でして、神アラーは最後の審判の後、天国での幸福もくださるし、最後の審判の前、この世の中でもちゃんと法律を作ってくださって、われわれの幸せを保証しているという、こういう考え方なんです。というわけで、聖書の研究が非常に発達しました。中世のイスラム世界というのはヨーロッパなんかよりずっと学術水準が高く、古代ギリシャの学問もよく吸収して、自然科学なんかも大発展したわけです。

このシステムを真似したのが、キリスト教徒が作った大学です。よく本を見ると、世界で最初の大学はイタリアのボローニャに、十二世紀にできましたなんて書いてあります。十二世紀に大学ができたというのは正しいんですけども、それが世界最初だというのはキリスト教徒から見た場合の話であつて、実はイスラム世界には大学なんかいっぱいあつたんですね。それを真似してボローニャに作った。

どうしてそれまでキリスト教徒は大学を作る必要がなかったかとい

うと、それは、キリスト教がイスラム教と違う考え方を持っていたからです。キリスト教の場合には「二重の王国論」と言うんですけれども、キリスト教の場合にも最後の審判があつて、その後、神の国がやってくる、ここに入るのが人びとの最終目的だ。これは、キリスト教徒もイスラム教徒もよく似ているわけです。それじゃ、最後の審判がやってくるまでキリスト教徒はどうやって生活したらいいんでしょうか。イエス・キリストは、キリスト法というのを残して、毎日エルサレムの方向に向いて五回礼拝をしないとか、牛を食べてはいけませんとか、そういうふうなことを決めたとすると、何にもないでしょう。キリスト法というのはないんです。何にもないんです。キリスト教徒は最後の審判のときまでどうやって生活したらいいか、聖書をひっくり返しても何にも書いていないんですね。書いてあるのは「愛」という言葉だけで、仲よくやっていきなさいというわけです。これは心構えの問題ですから、そのとおりのまいくとは限らない。そこでキリスト教徒の場合、ゲルマンの王様やあちこちの領主が勝手に法律を作った。ゲルマン法とか、こういう法律は大体めっちゃめっちゃですし、宗教上の意味もないですから、こういうのを研究するためにわざわざ大学を作る必要はないんです。だから、大学なんか全然作らなかった、こういうわけなんですけれども。

しかし、それではあんまりだといふので、聖書の勉強をする場合は、みんなヨーロッパからアレキサンドリアあたりまで、イスラム教徒の大学に留学して勉強に行ったわけです。それぐらいヨーロッパは学力が低かったんですが、どうしてそういう情けないことになっちゃったかという、旧約聖書と新約聖書とあるでしょう。キリスト教徒だったらこれを読まなくちゃいけないじゃありませんか。しかし、中世のキリスト教徒は、こんなもの読めなかった。どうしてかという、新約聖書はギリシャ語で書いてあるし、旧約聖書はヘブライ語で書いてあるから、外国語ですから、ヨーロッパの普通のお坊さんはこれは読

めない。彼らはラテン語しかできない。ラテン語でもできれば大したものだったんですね。というわけで、聖書の原文は読めなかったわけです。聖書の原文を読んでいたのはイスラム教徒たちで、イスラム教徒はヘブライ語やギリシャ語をよく勉強していましたから学力は高かった。それで留学せざるをえなかったんですね。論争しても負けちゃうわけです、学力の差がありますから。そこでギリシャ語、ヘブライ語のよくできるようになったヨーロッパ人は、それを大学で教えようと思いつきました。

もうひとつの柱はラテン語の研究で、これはローマ法の研究に役立ちました。ローマ法は、国際法ですけれども、昔ローマ帝国で通用していた古い古い法律です。それが、ヨーロッパがばらばらになった後、全く効力を失っていたんだけど、フランスとかイギリスとかドイツとか、ヨーロッパの国々がだんだん勢力を盛り返して、一つの交易圏をこしらえるようになると、共通の法律が必要になる。ゲルマン法や何かじゃしようがないわけです。そこで、昔あったローマ法というのをひっくり返ってきて、これを共通の法律にすることにしました。

『ベニスの商人』であるでしょう。あそこにポーシャという人が出てくるでしょう。アントーニオとバッサーニオがどうのこうのでユダヤ人のシャイロックと裁判になって、最後に偉い人が出てきて、ポーシャが男に変装しているんですが、それで大きな分厚い本をこうやってめくって、法律によるとこれこれというふうに裁判をするわけですが、あのとときの分厚い法典はローマ法典なわけです。中世も末期には、ローマ法がだんだん国際的な法律になってきたわけですね。

ローマ法というのは普遍的な知識です。フランスでもドイツでもイタリアでも通用する。ローマ法を研究するためにポロニアで最初の大学ができた。その後もヨーロッパであちこち大学ができますが、そのあらかたは、ギリシャ語・ラテン語やヘブライ語を研究した神学

部の大学です。神学も法学も普遍的な知識には違いがない。そういうふうに、キリスト教圏の大学ができました。

こんな具合に、ヨーロッパに大学がだんだんできてきました。神学と法学だけじゃちょっと足りないというので、あと医学、それから音楽、論理学、幾何学なんかを大学で教えることになりました。学科の数は、四つとか七つとか、数え方がいろいろありますけれどもね。

そして、大学というのは、初めは塾みたいなものから始まって、先生が一個所に住んでいると学生が周りに集まってくる。そして、学生が先生に月謝を払う。先生は先生で、モグリ先生が現われるといけませんから、ギルドといって何か縄張りみたいなものを作りまして、それで資格試験やなんかをして教授とか助教教授とか、そういうのを決めるんですね。修士のことをマスターというのも、徒弟制度のなごりなんです。教授や学生が集まっているところは一つの街になりました、大学街というのができる。これが大体ヨーロッパの大学の組織で、我々もこれを真似しているのです。ケンブリッジやオックスフォードにはカレッジというのがあります。カレッジにはいろいろな意味があるけれども、ここでは学寮という意味ですね。ニュートンがいたトリニティ・カレッジは、今でもあって、古びた建物らしいですけども、そこには学生も先生も一緒に住んで共同生活をするんですね。そういうカレッジが幾つも集まって、だんだん大きくなったものをユニバーシティ（総合大学）と言います。以上が、大学の基本型なんです。普遍的な知識を教えるのが大学だから、例えば、工学なんていうものは、大学で教えるべきものだと、長い間、考えられていなかった。工学というのは、直接、実社会に役立つものだから。アメリカの大学にMITというのがあるでしょう。これはマサチューセッツ工科大学というんですけども、ユニバーシティでも何でもなくて、ただのインスティテュート、研究所と訳したりしますが、大学よりも格が低いものというふうにはじめは見られていたわけです。工学というのは

ユニバーシティの中に入っていないんですね。そんなことを言っても、東大に工学部もあるし、日本中の大学に工学部あるじゃないかって言うかもしれないけれども、東大の工学部を作ったのは、日本人の独創のようなもので、世界で二番目にできた工学部だと言われています。工学部はそもそも大学になかったんだ。神学部や医学部しかなかった。こういうものです。

大学の制度はすばらしいというので、産業革命の後、それを進めるのに科学技術が必要になりましたから、世界中の国々がこのシステムを真似してヨーロッパ風の大学を作りました。そこでわが国にも大学があるんだけれども、我が国の大学はいかんせん古い歴史を—宗教にさかのぼるこの大学の歴史というものを知らないで作ったんで、どうも大学の精神が誤解されているなと思うんですね。つぎにそのところを話しましょう。

二番目に言いたいことは、日本の大学はどこがおかしい、ということなんですけれども、言いたいことを二つに絞れば、まず、日本人が大学について誤解している最大のおおもととは、大学というのは国が作るんだ、学校というのは国が作るんだ、こういうふうに思いこんでいることです。私立大学というのもあるんですけど、これもそうですけれども、でも、何か文部省が設置基準とかなんとかいろいろ言っていますよね。そういうふうに誰かが許可して学校ができるというふうについて思っています。いがちであります。これは大間違いなんです。

二番目に大学をめっちゃめっちゃにしているものに試験地獄というものがあって、これは困ったものですが、これも日本人が学校というものを誤解してでき上がった産物であるというふうに思います。大学についての誤解と試験地獄、この二つをやっつけなくちゃいけないわけですけども、その辺をお話ししましょう。

大学と国家とどう関係にあるでしょうか。日本では確かに国が大学を作りました。しかし、大学と国とどっちが古い。イタリアで

もドイツでも、あんな国は百五十年ぐらい前にできたわけであって、ポロニーヤ大学ができたところに影も形もなかった、イタリアなんていう国は。どこの大学でもみんなそうです。近代国家より古いんだ。だから、大学が国の許可を得なきゃならないなんていう理由は一つもないんです。なのに、日本でそうなっちゃっているのは、それは日本が国の政策で大学を作ることにしたからです。大学だけじゃなくて日本は、小学校も中学校も高等学校も、全部国で作ったんです。だから、一般の人びとは、あれよあれよという間に大学ができてしまったんで、どうもびんと来ていないんですね。

じゃ、日本に自分たちで作り上げた学校が全然なかったかというところ、そんなことはないんで、江戸時代を考えるといっぱいありました。例えば、各藩には藩校というものがあつたでしょう。それから町々には寺子屋というものもあつたでしょう。それから明治になると女紅場じよこばというのがありました。これは裁縫やお稽古事みたいなものを習うんですけれども、明治の初めには、女の子はみんな、小学校なんかに行かないで女紅場に行きなさい、じゃないとお嫁さんになれないよとか言われたものです。それから私塾、適々塾とかいろいろありましたね。ああいうものがいっぱいあつたでしょう。こういうものはおおむね明治維新のあと潰されてしまつて、こういうのを潰した後に、それと対立するものとして国が学校を作ったわけです。これは大変へんてこなことです。

初等、中等教育の話は今日はいけませんけれども、じゃ、どうして大学を作ったかというところ、それは普遍的な知識を教えるためだったでしょう。そうじゃなくて、殖産興業のため、そして新しいエリートを生み出すためでした。特に東大の法学部のようなものが典型で、わざわざそういうものをこしらえて、そこから役人をたくさん作り出すとしたんですね。そういう政府の政策です。

ネーミングがまた非常に巧妙で、まず、小学校があつて、次が中学

校で、次が高等学校で、その上に大学があつたりなんかしますから、なるほど小があつて、中があつて、大なのか、だんだん難しいことを習うようになっていくのが大学なんだな、というふうに思つてしまふわけです。けれども、そうじゃなくて、小学校や中学校みたいな学校と、大学とは全然性質が違うのです。大学というのは国際機関なんです。それに対して、小学校や中学校は、地域に密着しているわけですから、その国の言葉や、その国の風俗・習慣や、その地域で生活していくのに必要なことを教えていけばいいんですね。いっぽう大学は国際組織ですから、そういう地域の特性みたいなものとあまり関係ないんで、小・中・高と大学とは全く切れているんです、本来は。だから、ユニバーシティを大学と訳したのが、まず問題だった。

つぎに、さっき東大法学部の悪口を言いましたが、どうしてこういうものができたのか。東大は非常に悪いことになっていきますけれども、いい一面もありました。東大を作った目的はなぜかというところ、藩閥政治に対抗するためです。藩閥政治といつても皆さんはあまり馴染みがないかもしれませんが、明治維新をやつてのけたのは薩長連合軍でしたね。薩長連合の侍たちが全員、政府の役人に就職してしまつたわけだ。そして幅をきかせていて、ほかの人にはさっぱりポストが割り振られなかった。

私の父方の先祖は東北の出身なんです。東北地方は、明治維新のときに奥州列藩同盟というのを作りまして、江戸幕府を支持して薩長連合に反対したでしょう。そこで戊辰戦争になって、官軍と戦つて負けて、賊軍（朝敵）にされてしまつたわけです。朝敵にされてしまつたらどうなるかというところ、役人にも軍人にも警察官にも何にもなれない。公務員になれなくなつちやつたんですね。そこで私の祖父や親戚たちは、そういう道を辞めてほかの道に進まざるを得なかったのです。ですから東北地方の人たちは、一昔前まで、寄ると触ると「薩長のやつらは」と言うのが合言葉でした。そういう時代もあつた。

これを放っておいたのでは、日本が分裂して、近代国家としての体をなさないでしょう。コネが幅きかせていても困る。そこでコネを一掃するため、試験で大学生を採用し、その大学生を役人にするにしよう。そうやって国家のポストを分配するために、試験を採用することにしたんですね。そのためにわざわざ東大やほかの大学を作ったんだ。そうすると、薩長藩閥のどら息子やなんかはあまり勉強しませんが、試験に落ちこっちゃって、コネがきかないでちょうどいい。こういう社会的公平という観点もあつたわけです。

だから、当時としてはよかつたんですけども、そういうのは明治の初めの話で、そういうのは目的を達したところでさっさとやめればよかつたんだけど、それがずっと続いてしまった。そこで日本人の間に試験を受けて学校に行けば、その後、就職は何とかなるといふ、そういう観念がどんどん広まっていってわけです。そして戦後、大学が乱造されたときに、ますますその傾向がひどくなって、皆さんも非常に苦しめられた受験地獄が、上は大学から下は小学校・幼稚園に至るまで日本中を覆い尽くしてしまつた。こういうことがあります。

それで、戦後の学校になっていくんですけども、プリントの2のところを書いてあるのは、旧制高校の話なんだけれども、時間の関係で、省略しましょう。

それで、日本の学校というのはおもしろい特徴があります。何で受験地獄になっちゃうかというのと、いい学校に入って、いい仕事につけるように。こういうふうに思うからなんです。こんなふうに、学校がその人の人生に大きな意味を持つてしまう社会を、学歴社会というふうにふつう言います。これは悪いものであるとされている。しかし、日本は、本当に学歴社会なんでしょうか。私はそうじゃないと思えます。日本では学歴社会と言いつつ実は学歴社会なんです。学歴社会と学校歴社会というのはどう違うかというのと、学歴社会の方は、その人が何を勉強して、どういうことを身につけたかということを中心

する社会です。いっぽう、学校歴社会の方は、何を勉強したかなんかどうでもいいんです。そんなことより、どの学校を出たかを問題にするわけです。似ているけれども、大変違うでしょう。

学校歴社会というのはどうやってでき上がるか。その構造を見てみますと、まず、学校があつて、ここに入り口があるでしょう。入口に入学試験があるわけですね。入学試験は、ただ座っていたんでは通らないから、準備しなければなりません。そこで努力するわけです。努力すると合格できるかもしれない。こういうふうに、ある人が努力をした結果、何事かができるというのを、業績(achievement)と言います。業績によつてその人が処遇されるのは非常にいいことで、近代社会の重要な特徴です。ところが、ここから先が変なので、この後、卒業しますよね。卒業すると学校歴というのがくつついて、肩書きになるわけですね。そうすると、あの人はこういう学校を出た、この人はああいう学校を出たということがずつとついて回つて、何かその人がどういうランクであるかみたいな意味になっちゃうたりするわけです。こういうおかしなことになるわけですが、こういうのは業績ではなくて、属性(ascription)というものです。その人の持つて生まれた何か、みたいになっちゃうわけです。

今の社会は、生まれ血筋や身分みたいな属性はよくないから、全部業績で物事を決めましょうというふうになってきたはずなのに、この学校歴の考え方が残っていると、十八歳か二十歳か知りませんが、そのときある時点で何をしたかということが、そこでは業績なんだけれども、くるっと属性に転化してしまひまして、それが大手を振つてあとずつと歩いていく、非常に変な社会になります。ここ(大学入試)までは自由競争ですけども、そこから先は封建主義になっちゃうんだ。こういうシステムです。これでは自由競争も市民社会もへちまもない。本当の学歴社会というのはこうじゃなくて、一生勉強ですから、十八だろうが、二十だろうが、三十だろうが、四十だろうが、

五十だろが、そのときまでに彼が何をやってきたかということはいつでも不断に評価されていく社会です。でも、学校歴社会はそうじゃない。学校歴社会だと、十八歳かなんかのときの大学の入学試験にエネルギーをうんと集中した方がいいわけで、それが合理的ですからみんな一生懸命勉強するわけで、受験地獄になってしまします。そのかわりにどうなるかというところ入学試験が難しければ難しいほど、その後の卒業が簡単になるという定理があるんだけども学校の中身が空洞になります。勉強してもしなくても卒業できるんだから、勉強したら損だよ。好きで勉強する人はいいんですけど、たいていの学生は、勉強する動機を失います。そうすると、この受験地獄があるおかげで大学の中身というのはほとんど空っぽになっていく、こういうことが実際に起きているわけです。

日本にいとこれが当たり前ですから全く気がつかないかもしれないかもしれませんけれども、このシステムをアメリカの大学と比べてみたらもう一目瞭然ですね。私の親戚には、アメリカの高校・大学を卒業したのが何人かいるのでいろいろ聞くんですけど、まず、入学試験なんがない。全然そんなものは必要ないんですね。高校のことをきちんとやっていたらいい。ただ、大学に入ってからが大変です。一つでも単位をきちんと取るためには、寝る間がないとは言いませんが、毎日、毎日、宿題をこなして、新しい知識を身につけて、それを吸収して自分のものにしていくという、それをやっているだけでも自由時間がほとんどないぐらいの、ハードトレーニングを強いられる。私の親戚の子はあまり勉強が好きじゃない方だから、ああいう経験はもうこりこりで、大学には絶対行きたくないとか言っていましたけれども、素質と適性のある学生はどんどん伸びる。とにかく四年間、大変に絞られます。もしそこで本当に自分の土台ができるならば、その先、大学院に行くなり、いろいろ発展のチャンスがある。それが大学の正しい姿じゃないでしょうか。こういうふうでなくなってしまうのが入学試験

の罪悪なのです。

戦後の学制改革のときに、この入学試験をなくそうということが実は一つのテーマでした。それでアメリカ軍がやってきて、昔の大学をぶっ壊して六・三・三・四制にしました。これはアメリカのシステムと同じです。アメリカには入学試験がないわけだから、戦後の日本でも入学試験がなくなるはずだった。それから、大学もたくさん作ったんです。でも、ちっともなくならなかった。むしろそれどころか、入学試験はかえってひどくなって、昔はごく一部の人の問題だったのが、日本中をまきこむ大問題になってしまった、そういうことがあります。その辺を分析してもいいんですけど、ちょっと結論だけ言いますと、それはアメリカのシステムである教育制度の根本、例えば、教育委員会が学校を作るといふシステムが骨抜きになってしまったから。教育委員会は、学校をやめた校長先生なんか、教師のOBが文部省の意向を酌んで、学校を監督するという機関になっちゃった。大学なんかも旧制に比べレベルが下がり、遊園地なんて言われている。さっさと教育委員会をなくして大学も改革しないと、このままだったら大学も日本の教育も本当に減んじやうというところまで来ているわけです。

学校歴社会と学歴社会との区別は大切ですからもうちょっと説明します。

学校歴社会というのは、学校を卒業することが重要なんですけども、それは学校に入学することとほとんど同じです。入試が大変、卒業は簡単なんです。そうすると、大学の入口付近が地獄のような様相になり、そして大学の中は空っぽになる。学歴社会であれば、大学に入るまでの段階は中学や高校の勉強をしていけばいいわけです。大学と関係ない。大学は、卒業が難しい。そこで大学にいる間に一生懸命勉強して卒業します。競争があるという点ではどちらも同じです。で、学校歴社会が日本で、学歴社会がアメリカ。日本のほかにどうい

う社会がこうなっているかという、韓国とか、中国とか、いろいろな国が受験地獄で大変です。日本以上だ。大体これは昔の後進国はみんな学校歴社会になるんです。

どうして後進国が学校歴社会になるかというと、学校が足りないからです。学校の施設や教員が足りない。言葉を変えると、教育チャンスが少ない。逆の言い方をすると、進学希望者が多いんだ。これは後進国の特徴でしょう。日本だってついこの間まで後進国でした。私が大学に入ったころの大学進学率は、うんと伸びていましたけれども、やっぱり今ほど高くなくて二〇%ぐらいです。そうすると、大学に行きたいなと思う人よりも、大学に入れる人数の方が絶対量として少ないわけ。だから、入学試験以前のいろいろな理由で、大学に行きたいなと思いつながら大学に入らない（入れない）という人が相当いました。それから女性の進学率もまだまだ低かった。進学を希望しながら大学に行かなかった人がたくさんいたのです。その上で、大学の人数が少ないわけですからやっぱり大変な競争があつて、それで受験地獄になつてしまった。アメリカは後進国でも何でもありませんから、大学に入りたいた人がいればその分だけ大学を作りますから、そういうことはないんですね。だから、学歴社会のシステムができる。皆さん、学校歴社会のシステムと学歴社会のシステムどっちいいですか。

学校歴社会で、生まれた途端にまず親が考えることは、この子はちゃんと順調にいい学校に行けるだろうかという事です。それでまずいい幼稚園に行こうと、三歳ぐらいから能力開発教室に通います。それから私立に行こうか公立に行こうかとかいろいろあつて、小学校のころからまず塾に行つて学校では教わらない学力をつけなくちゃいけない。それからまた中学の試験があつて、中学の試験がなかった人も高校の試験があつて、それからいつでも上の学校の内容をずっと先取りしていくわけですね。入試は難しいので、学校だけじゃ足りないから、どうしても塾や予備校が必要です。それで高校を卒業しただけで

はすぐ受からなくて、浪人をしたりして頑張つて、それで入る。せっかく入ったらどうなるかというと、あとは黙つていても、今も寝ている人多いけれども、寝ていてもちゃんと卒業できるんですね。そうすると、卒業してからここでは何を勉強したんだろう、こういうことになりません。よく考えてみると、いい学校に入るためにずっと勉強していたはずなのに、大学に入ってみたらもう勉強することないんですね。だって、この後には入学試験がないんだから。これが学校歴社会、つまり今の日本のあり方でしょう。

学歴社会というのは全然違います。小学校では小学校の勉強をするんです。中学校では中学校の勉強をするんです。高校では高校の勉強をするんです。高校の勉強までよくわかったら大学に入れるんです。ただ、入った後が大変だ。大学が要求している学力の水準というのがありますから、それをきちんと身につけないと退学になっちゃう。アメリカではキックアウトと言うんですけれどもキックアウトですから「蹴飛ばす」ですね。大学には一応入れてくれるんですけども、ちょうど今ごろの時期に春学期の成績の発表というのがあつて、アメリカは九月から始まるから違うかもしれませんが、ちょうど半年在席したところで「修業の見込みなし」なんていうふうな成績が出ちゃった人は、あなたはちょっとほかのところへ行つた方がいいですよとアドバイスされちゃうんですね。そのままいてもいいですけども、月謝の無駄ですから、そういう人はだんだん進路を考えていく。本当に志があつて、この専門でやりたいんだという人は歯を食いしばつても頑張つていけば、初志貫徹できるわけです。

入学試験というのは大学がやっている試験ですけども、勉強している内容は高校までの内容でしょう。この後で学ぶ専門に関係ないんだ。政治、経済とか、理学、工学とか、そういうのじゃなくて、その準備だけやっているんですからね。そこにエネルギーをかけるよりも、自分の専門、これから職業と結びついていく美術とか、音楽とか、法

律とか、経済とか、その中身で勝負する方が社会的にもプラスじゃないですか。絶対に学歴社会のシステムのほうが優れていると私は思います。

皆さんだってこの方がいいはずですよ。皆さんは入学試験が済んじゃったのに、最悪のケースはこれですね、必死で入学試験を合格して、入ってみたら、大学は今度は学歴社会に変わっちゃった。こういう制度の切替時期に当たった人は運が悪かったわけですけどもーそれともまた人生ですけれどもー単純に二つ比べてみるならばどっちがいいでしょう。皆さんは試験済んじゃったから、皆さんの子供さんか弟さん・妹さんにどちらの教育システムを与えたいだろうか。これは私は、絶対学歴社会システムのほうがいいと思うわけです。だから、こういうふうに変えなきゃいけない。これが大学改革の中身ですよ。

こういう改革をやりたいんですけど、そうすると、おっと待ったというふうにして、いろいろ出てくるんですね。例えば、単位制の大学ですね。単位が取れたかどうかで卒業を決めるというシステムの大学を作ろうとすると、大学の学生定員という考え方と矛盾するんです。それはそうでしょう。だって、単位の取れない学生をどんどん退学させたら定員割れをするからね。逆に言うと、卒業の人数を確保しようと思ったら、卒業する人数の何倍も入学させないとだめなわけです。何倍も入学させるから入学試験がなくなるんだけどね。だけれども、日本の文部省というのは、定員の考え方でかんじがらめになっています。国立大学なんていうのは定員の3%か5%入学試験で多くとったりなんかすると後で怒られて、教室が足りなくなって大変になるんですね。定員ぎりぎりにとるということは、そのまま卒業させなさいということなんです。だから、単位というのはあるけれども、形式的で、全然そんなものは役に立っていないわけだ。単位制を採用んなら定員制は採れない、定員制を採用んなら単位制は採れないという、こういう関係にあるのに、文部省は両方やっているんですからち

よっとおかしいんですね。だから、まず定員制をやめましょう。私立大学でも定員の何倍もとっている大学があって、それはとてもいい大学だと私は思いますが、そういうのは行政指導されちゃったりなんかするんですが、それは文部省の方が間違っていると思いますね。これが一つ。

定員というのを持ち出した文部省というのは何をやってたかという、昔は学校が足りませんでしたから学校を国が作ってあげて、ここは学生何人というふうに割り当てて監督していた。その頃の体質がまだ残っているんですね。そういう規制をなくす。規制をなくして、学校をじゃんじゃん作っていいことにしないと、学歴社会に移行するのは無理だと思います。そういうふうなことを言いたいんですが、もうちょっと先に進むために、プリントの三に進みましょう。

今、大学は何をやっているかということなんですけれども、大きく分けて二つあります。一つは教育、もう一つは研究です。この両方を話さないとなんか全部話したことになるんですが、今日は、皆さんあまり研究にまだ関係ないみたいですから、研究の話はしません。そこで、教育の話をしていきましょう。大学というのは教育機関ですから、教育がうまくいけばいいんです。大学ではどうやって教育をしているか。大学の教育サービスは、学生さんに講義を聞かせて、学生さんから月謝を取る、こういうふうになっています。教育サービスというのは、要するに今ここで私がやっているみたいに、教室に学生さんを集めて、そこでべらべら喋る、講義をすることなんです。この講義というやり方は何千年も前に発明された当時から、全く進歩していない。今私はマイクを使っていますけれども、これは大した問題じゃない。内容そのものは本当に進歩していません。こんなものは改革すべきです、さっさと。

講義 (Vorlesung) というのは何か。これはドイツ語でたしか、読むという意味なんですけれども、要するに先生が準備してきたノートを

学生さんの前でこうやって読んでいくという意味なんです。何でそんなことをするのか。それは昔、本が足りなかったからです。印刷術もなかった。そこで本はどうやって作ったかというところ、先生がまず家の本を書いてきて、それで大学で講義をする、つまりそれを読むでしょう。そうすると、学生さんはそれを聞きながら筆記していく。そうすると、学生さんの人数分だけ本ができるわけだ。これは印刷しないから一番安い。この目的のために、本をふやすために講義というのはあったわけです。

だから、印刷術があれば講義はなくていいはずなんです、教科書があるんだから。そうしたらあとは、教科書をもとにして討論すればいいんです。だけれども、印刷術の出来たときに改革に失敗して、講義をするというスタイルが続いていました。今だったら何かあるかというと、印刷術以外にいっぱいあるでしょう、ビデオもあるし。何も学生さんを一個所に集めて先生がそこで何かやらなくたって、もしこれをビデオにとれば図書館で好きなときに見ればいいし、それから大学に来なくたって放送大学だって別にいいですよ。講義にしなくちゃいけないと、先生はナマですから一個所にしか出演できないでしょう。そうすると、どの大学にも専属の先生というのがいて、そこでライブの講義をしなくちゃいけないわけだ。もしこれをビデオにできれば、ナマじゃなくてもいいのですから、各大学に専属の先生が張りついていなくても、日本中の大学の先生の講義を皆さんは好きなように聞いて、それできちんと単位を取れば、それを履修できる。そうしたら皆さんはどうでしょう。日本中の先生の中から自分にぴったりの先生を自由に選べるではないですか。そのほうが教育のサービスの質は、ずっと上がることになると思います。

ということは、講義というものを改革していけば、大学がここにあるから、学生さんが教室にいるから、この大学にいななくちゃならないということはなくなるはずです。日本中の大学は全部一つでいいんだ。

大学というのは、要するに、ビデオを見る場所ということでもいい。図書館とサークル室とビデオを見る場所さえあれば、それで授業が成立する。あとゼミ室がちょっと要りますけれどもね。そういうふうに改革すれば、さっきの学生定員の問題というのはあらかた解決して、全く新しい形の大学が作れるじゃないかというふうに思います。だから、講義というものも疑って行こう、こういうことですね。

どうしてそういう改革ができるかというと、実は日本の大学というのは、昔の貧しいころの大学の考え方でできているんだけど、もう日本は後進国じゃないでしょう。だから、学校が足りないんじゃないって、実は学校がたくさんあり過ぎるんだ。今、余っている。それから、教育チャンスは多い。それから進学希望者は相対的に少ない。こういう先進国型の時代になっているわけですよ。これを「大学冬の時代」なんて言う人がいますけれども、私は反対で、むしろこういうふうになったからこそ大学の自由度が増えて、今までの貧しい大学を一步先へ進めることができるんじゃないかなというふうに思います。

つぎに、入試はなくせるという話なんですけれども、その前にちょっとだけ説明すると、教育チャンスは多くて、学校がたくさんあるわけですから、本当は学校は互いに競争を始めているわけです。学生さんに来てもらおうということをめぐるってね。現に大学以外の学校は全部そうなっていて、塾なんか見てごらん下さい、こっちは安くなったし、あっちがチェーンを広げたりしてものすごい競争ですよ。ちょっとでもサービスが悪いところはどんどん潰れていくでしょう。ほかの専修学校、専門学校でもみんな同じです。大学だけのほんとしていいるのは、いろいろ学校歴の神話があって、入試の難しい大学というのがあったりなんかして、それから定員というものがあって、それで競争が縛られているからです。競争できないようになっていいる。競争があれば、定員の枠がなくなって自由に学生を採れるようになれば、大学にだっけきちんと競争が起こるわけです。そうすると、大学

のサービスがよくなるから、受益者である学生さんにとってはプラスになるはずです。そういう競争を、大学の中にもきちんと復原させようと思います。とりあえず文部行政の担当者にぜひやってもらいたいなと思います。入試をなくそう、試験地獄はもうやめようという宣言ですね。来年からは無理ですから、とりあえず七年後でいいと思います。何かコメの輸入自由化みたいですけど、七年後に入試をなくすと細川内閣が宣言する。その根拠は十分あります。高校卒業人口はだんだんいま、御存じのように減っています。どこまで減るかという、進学率が多少あがると考えても、大学の入学定員ぐらゐまで減っちゃうわけ。だから、高校進学希望者が全員大学に入るわけです。だから七年後には、入学試験をしなくても全員入れるという客観的な条件があるんです。七年後にそうしようねと約束して、そのとおりになるんならば、逆算して今の小学校六年生からは塾に行かなくて済むんだ。夏休みはキャンプに行ったりできるし、中学、高校だったらクラブでも何でも思う存分できるでしょう。そういうふうに、小学校も中学も高校もみんな生き返る、塾はなくなる。そういうふうにして日本の教育を復活させることが、今そういうふうに政策決断すれば、できるわけ。なぜしないのか。ぜひしてほしいと思いますけれどもね。

だけれども、定員と進学希望者が同じになるというのは一つの条件だ。学校歴神話そのものを崩さなかったら、仮に大学の定員が空いていて座席がガラガラでも、入学試験はずっとあります。

例えば、東京の都立高校というのを考えてみてください。昔、東京では高校が足りませんでした。学校が足りないなら学校を作ればいいんじゃないか。「十五の春を泣かせないように」というんで、都立高校を作る署名を東京都民が集めて、東京中に都立高校というのをたくさん作ったんです。だけれども、どうなったかという、学校歴神話が

残っていたから、昔からある日比谷とか、九段とか、西とか、そういう学校はいい学校で、新しくできた学校はよくない学校なんて、誰が決めたんだか知らないけれども、そういうことになってしまった。そうすると、どうなるかというと、少しでもいい学校に行きたいと親も子供も思うから、そうすると塾に行くでしょう。そうすると入学試験になって、新しくできた学校は閑古鳥、こういうふうになっちゃうわけです。そうじゃなくて、もっといいやり方を考えれば何とかなったんです。高校だけで改革しようと思っても大学があるから無理です。でも、大学で入学試験をなくそうと言ったら、その先もう試験はないわけですから、高校も中学も小学校も全部変わる。そういうわけで、できると思います。だから、客観的条件があるときに学校歴神話をきちんと壊すようなやり方をする。それには定員制をなくして単位制を復活して、それから学校の区別というのをどんだんなくして、どの大学の卒業者もみんな区別しないようにするということをするべきではないでしょうか。そういうふうに切に望みます。

今の教育がどういうふうにひどいかは、皆さんここまで学校でいろいろ勉強してきて、もううんざりしていると思うけれども、よく御存じのほうです。皆さんはもう済んじゃったから関係ないやと思うかもしれないけれども、関係ないんじゃないやなくて、やっぱりこれはいつか誰かがやらなきゃならない問題です。皆さんもたつた今そういうのを経験してきたところですから、これを機会にそういうことをぜひ考えていただきたいというのがひとつ。あと、一番難しいのは、この学校歴社会の中で入試をくぐり抜けて大学に入ったときに、当面の目標がなくて真空状態になっちゃうという点が一番難しい。大学に入ったときは、せっかく入ったからあれもやろう、これもやろうと皆さん思っているでしょうけれども、やっぱり人間はそんなに強くないからどうしても慣れちゃうんです。外からきつい要求をされないと、「まあ、これでいいか」みたいに自分の目標を低くしちゃうんだ、それでもちゃん

と卒業できるから。そうじゃなくて、やっぱりほとんど自動的に卒業できちゃうみたいな大学だけれども、コロナは単位制の、自分に厳しい大学というところでやって行かないと、これから先もし七年後に大学改革が成功して、そのあとの卒業生の質が上がってきたときに、後輩たちに七年前の卒業生は大したことないなんて言われちゃうかもしれないですね、頑張りましたよ。私も、団塊の世代と言うんですけども、大学にろくに行っていなかったもので、団塊の世代は人数だけ多くて目障りで困るとか言いたい放題言われているわけですけども、皆さんもそんなことにならないようにお願いします。

大体時間になりました。

じゃ、ここまでで。(拍手)

(東京工業大学助教授)